

カトリック山形教会報 かすみ

12

2014.12.24



カトリック山形教会

〒990-0039 山形市香澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3590

ホームページ <http://www.catholic-yamagata.com/>



「来た、見た、そして…」 待降節黙想会 講師／永山誠神父(神言会)

12月7日(日)、神言会・日本管区長の永山誠神父を迎え、「待降節の黙想会」が開かれました。昨年9月に新潟で本間神父から黙想会の依頼があり、お引き受けしたそうです。3、4年前にも当教会で黙想会をしておられ、その時のお話と重複することもあるかも知れませんが、全てを忘れ、リセットして聞けば、とても良い黙想会になり、聞いたことがあると思って聞けば、疲れだけをもち帰る黙想会になります…と、ユーモアを交え、今年の待降節の黙想会が始まりました。

人間の言葉は色々と誤解を招いたり、喜びを与えたり、人間っていいなあ…と、感じたり。言葉は「生き物」ということを私たちはよく知っています。それはヨハネ福音書の「その言葉は命であり、光であり、神そのものである」という部分を黙想されるといいのではと思います。私たちが普段使っている言葉。しかし、その言葉はキリストとともにある言葉。あるいはキリストが私によって生きているという言葉。そういう意味では日々の「主の祈り」でもいいかと思えます。ただ、今まで何の気なしに、口を開いただけのことでなく、どういふ言葉を発したのだろうか…と。祈ったのだろうか…と。そうすれば今までとは違った祈りになると思えます。

私が紹介したい作文があります。罪の赦しとか、あるい

は神の愛を感じるができないときに、思い出していただきたい。小学校四年生が書いた作文です。灰谷健次郎の本の中に納められています。

* * *

「チューインガムひとつ」

せんせい おこらんとって せんせい おこらんとってね
わたし ものすごくわるいことした
わたし おみせやさんの チューインガムとってん
一年生の子とふたりで チューインガムとってしもてん
すぐ みつかってしもた きっと かみさん(神様)が
おばさんにしらせたんや わたし ものもいわれへん
からだか おもちゃみたいに カタカタふるえるねん

わたしが一年生の子に 「とり」いうてん
 一年生の子が 「あんたもとり」いうたけど
 わたしはみつかったらいややから いややいうた
 一年生の子がとった
 でも わたしがわるい その子の百ばいも千ばいもわるい
 わるい わるい わるい わたしがわるい
 おかあちゃんに みつからへんとおもったのに
 やっぱり すぐ みつかった
 あんなこわいおかあちゃんのかお見たことない
 あんなかなしそうなおかあちゃんのかお見たことない
 しぬくらいたかれて
 「こんな子 うちの子とちがう 出ていき」
 おかあちゃんはなきながら そないいうねん
 わたしひとり出ていってん いつでもいくこうえんにいっ
 たら よその国へいったみたいない気がしたよ
 せんせい どこかへ いってしまお とおもた
 でも なんぼあるいても どこへもいくところあへん
 なんぼ かんがえても あしぱっかりふるえて
 なんにも かんがえられへん おそうに うちへかえって
 さかなみたいにおかあちゃんにあやまってん
 けどおかあちゃんは わたしのかおを見て ないばかり
 いる わたしは どうして あんなわるいことしてんやろ
 もう二日もたっているのに おかあちゃんは
 まだ さみしそうにないている せんせい どないしよう
 (「灰谷健次郎 子どもに教わったこと」角川文庫より転記)

* * *

好きな作文の一つです。私たちは赦しというのを何かす
 ごく窮屈な思いをして、あの窮屈なボックスに入ります。何
 か罰を受けるのではないか、何か裁きみたいな言葉を受け
 るのではないか、自分の悪いことを突かれるのではないか。
 でも、それは回心でもなし、赦しでもありません。

この女の子が自分のお母さんの後ろ姿を見て、あるいは
 お母さんが「あんたはうちの子と違う」「そういう悪さをする
 子は私の子ではない」と言って、涙するお母さんを見て、心
 の痛みを感じて、本当に悪いことをしたことを悔いた女の
 子は、つくづくお母さんの愛を感じたのではないのでしょうか。

家を出てしまったけれど、帰るところはお母さんのところ
 しかない。そういう思いが私たちの赦しの秘蹟になると、私
 は思います。

私は学校に勤務していましたので、時々、悪さをする生
 徒に特別指導をしていました。そういうときは大抵保護者
 が来ます。その保護者を前にして、こういう指導を行います。

あるとき中学生4、5人が指導上問題があったので、お母
 さんに来ていただきました。そして、こういう言葉を言います。
 「お母さんの涙を知っている子はぶれない」「お母さん、正
 直に悔しさを子どもにぶつけてください」「素直に子どもの
 前で泣いてください」…と。子どもは何かを感じると思いま
 す。案の定、子どもは感ずます。もう二度とお母さんの涙は
 見たくない、お母さんを悲しませたくない…と。

私たちと神さまとの関わりもそうではないのでしょうか。神の

愛を知れば知るほど、赦しを必要とするものであることを
 私たちは知ります。従って、赦しの秘蹟というのは決して何
 か問い詰めるようなものではなく、もっと喜びをもって、重い
 肩の荷を下ろしてもらおうようなものではないでしょうか。

(中略)

皆さんにとって赦しの秘蹟が窮屈なもの、あるいは自分
 が裁かれているような気持ちであるならば、もう一度十字
 架のイエスを見られたらいいと思います。そこにはこんなこ
 とが込められています。「あなたたちが私に刃(やいば)を
 向けたとしても、私の愛は変わらない」。

皆さんが今日ここにいる意味は、神に赦しをいただいで
 ここにいる。赦しの恵みの素晴らしさを誰よりも知るが故に、
 その恵みを沢山受けていることを知っているが故に、今、
 私の身を神さまの前に置きます。毎回のミサで赦しの恵み
 を願います。

待降節が始まりました。ミサの集会祈願の中に私たちは
 どういう心をもって待降節を迎えたいのか書かれています。
 「希望の光を注いでくださる神よ、待降節の歩みを始
 める私たちの心の目を開いてください。日々の生活の中で、
 あなたが望んでおられることを見極め、主キリストに従って
 生きることができるよう」…。すごく意味の深い言葉で
 はないでしょうか。私たちが待降節を通して「主よ来てくだ
 さい」…と、祈ります。でも、それが「口だけの祈りに終わ
 ることのないように、家庭の中で、あるいは社会や職場の
 中で自分の祈りとして待降節を過ごされたら、ひとつの捧
 げになると思います。

教皇フランシスコは著書にこう書かれています。「私た
 ち一人一人のキリスト者を変えようとしています。教会のこ
 れまでの伝統を変えようとしています。今までとは違い、もっ
 と教会を開きなさい。開かれた教会、動く教会になりなさい。
 じっと座っている教会ではなく、門を開き、そしてそこに祈り
 に来る人を招きなさい。飢えている人、社会的に困っている
 人を招きなさい」…と、呼びかけをしています。彼は教会
 に何を求めているか、そして皆さんに何を求めているか。
 神の言葉は神を信じる者たちを呼び起こそうとしている。
 行けという原動力が常にあらわれています。アブラハムは
 「新しい土地に出て行くように」…という呼びかけを受け入
 れました。モーセも「行きなさい私はあなたを遣わす」…と
 いう神の呼びかけを聞き、約束の地に導かれました。神は
 エレミアに言います。「私があなたを誰のところへ遣わそう
 とも行け」…と。今日、イエスの命じる「行きなさい」…とい
 う言葉は、教会の宣教を常に新たにされる現場と挑戦を示
 しています。皆は宣教の最も新しい出発に招かれています。
 全てのキリスト者、また、全ての共同体は主の求めている
 道を識別しなければなりません。

今、待降節に入っています。クリスマスには多くの人が
 教会の玄関をくぐると思います。初めてこの門をくぐる人も
 いると思います。色んな人が色んな思いを持って教会に来
 ると思います。その時に私たちはクリスマスのメッセージを
 どう伝えるのか、大事な事だと思えます。そして、それは良

チャンスだと思えます。山形教会には何となく自分が何者かに包まれているような、抱かれているような、祈りの雰囲気があります。普段、何となく自分を赦してくれているような、そういう雰囲気があります。それはすごく大事なことだと思います。教会の宣教にとっては…。

それは一日では生まれません。今日、ここに集った人、何らかの理由で来られなかった人。その人たちが、ここに向向いてきて、キリストの証し人として祈りを捧げ、ご聖体をいただくとき、私たちはそこに自らの信仰を告白しています。だから日曜日ごとに、私たちがここに集うことには大きな意味があります。集わなくても神さまは知っているからいい…。それは違います。神さまは知っています。だからこそ示さない。兄弟姉妹に対し、あるいは外に向かって歩むことです。クリスマスという素晴らしいチャンスの時、神の恵みが伝わる時を迎えようとしています。そのクリスマスに向かって、準備が進められているようなので、皆さんで強力して、素晴らしい待降節を過ごすことが、イエスさまを喜ばせることになると思います。皆さんに託されている大きな使命がそこにあるように思います。

(中略)

信徒は司祭にとって良きパートナーです。同じ仕事をする、それは共同作業です。神父もまた信徒にとって良きパートナーになりたい、なろうとして努力していますが、時々うまくいかないことがあります。それでも、イエスさまはその中にいると約束なさったのですから、それを信じて山形教会の様々な問題、課題を皆で解決していく。それもクリスマスの意味あいのひとつではないでしょうか。

この待降節の黙想会を本問神父からお願いされたとき、テーマを「来た、見た、そして…」にしてくださいとお願いしました。皆さんはこのテーマの中に何が見えますか。この「」の中は皆さんに入れてほしい。私が決めて、答はこれかありませんというものではありません。皆さんは教会に来ました。そして、見ました。それは一週間前と何も変わらない光景かも知れません。そして、その後何を入れるのか、十人十色だと思います。自らの信仰生活を振り返る。あるいは十字架のイエスさまを前にして、あるいは準備が始まった2000年前のクリスマスの光景をイメージしながら、何をその中に入れるのか。「来た、見た、そして、クリスマスの光景を私たちが目にするとき、神の子は来ました」。あるいは羊飼いたちが幼子を訪ね歩き、馬小屋までやって来た。あるいは東方の博士たちもやって来たと記されています。とにかくその現場に行きました。教会というこの建物の中に行きました。色んな意味があります。そして、見た。馬小屋の中に安らぐ幼子を見た羊飼いたちがいます。そして、その両親に見守られて寒さをしのいでいる光景を見た博士たちがいます。あるいはマリアやヨゼフにしても、ひとりの赤ん坊を目の当たりにしました。そして、それぞれそこに何を感じたのか。そのことを黙想することによって、今年の待降節を過ごされたいいのではと思います。

聖書の解釈でいえば、「来た、見た、そして告白した」。

あなたは生ける神の子イエス・キリストです。あなたは私たちにとってまことの救い主、預言者です。あなたの中にこそ救いがあり、哀れみがあり、正義があり、名誉があり、愛があり、希望があります。私はそのことを信じるが故に、今日もあなたの前に来て、あなたを賛美し、あなたとともに祈ります…。今は、私は私なりの言葉を使いましたが、これを皆さんたちが考え、黙想されたいいのではと思います。

イエスさまがあなたの前に現れ、「私はあなたを愛しています」…こう言われたら、あなたはどうしますか。イエスさまは繰り返し、私たちに「愛の言葉」をささやいています。どんな罪人であっても、どんなに世間を騒がせるような悪人といわれる人であっても、イエスは止むことなく「私はあなたを愛しています」「私はあなたを赦します」…。沢山の物語の中に出てきます。人々から後ろ指を指されるような罪人に対してすら、イエスは「さあ、来なさい、私は今日あなたと一緒に食事をしたい」。そのセリフはファリサイ人に対しても言います。食事に招かれたときイエスは喜んでファリサイ人のテーブルに着きます。また、そういったテーブルを準備できない人たちに対してもイエスは「私はあなたを愛しています」…。その愛の言葉をぜひ、耳を澄ませて聞いてみてください。私の全てが包み込まれていく。私の全てが赦されていく。私の全てを信じてくださっている。それが幼子として生まれてくるイエス・キリストです。そのことを私たちはクリスマスの時に確認します。イエスはこの世に来て私たちの人生の辛さ、悲しさを目の当たりにします。ひとつの「死」という現実です。小さな子どもが病気で亡くなります。しかし、それすら受け入れなければなりません。

クリスマスときにはぜひ「私はあなたを愛しています」という幼子イエスを通してのメッセージとして、私たちに常にささやかれている、その言葉を大事にしてほしい。素直な心になって受け入れてほしいです。

(中略)

イエスは私たち人間が受けなければならない「死」という現実を受け止めました。その「死」の現実の前に「復活」という恵みのときが来ることを私たちに残しました。イエスが求めているのは、自らの命の終わりををもって告げたのは新しい命の始まりが来ることです。私たちは社会の中で時々不幸や哀しみによって信仰がゆらぐことがあります。なぜ、神さまは守ってくれないのか。そんな時こそ、私たちは祈るべきではないでしょうか。私たちの信仰は神を信じて、神を愛して、はじめて始まる信仰なのです。

皆さんと分かち合ったことの繰り返しになると思いますが、「家庭」について、お話ししたいと思います。教皇様をはじめとして、「家庭」は「平和」から、「信仰」は「家庭」からということで家庭での信仰を生きるように促しています。私たちはいずれかの「家庭」に属しています。父がいて母がいて私がいるという、その家庭です。その家庭の中で信仰は育てられるのです。信仰は何も神を愛するだけではないのです。神とともに人を愛する。兄弟姉妹を愛する。教会に行って手を合わせ十字架の前にへりくだる。それが私の

信仰です。聖書の中に書いてあります。全てをもって神を愛しなさい。これが第一の掟です。しかし、それに引けを取らない第二の掟があります。兄弟を愛しなさい。隣人を愛しなさい。

私たちにとって、もしかしたら神さまを愛するのは簡単かも知れません。全知全能で完全なお方なのだから…。しかし、生活を共にしている欠点を持つ夫や妻を愛するのと神を愛するのは別物ではなく同じなのです。

神さまを愛するのなら、その夫や妻を愛しなさい。できることを尽くしなさい。それが神さまを愛することなのです。こうなると私たちの信仰は少し難しくなります。欠点ばかりが目につくその人をなぜ愛さなければ、大事にしなければならないのか。答はひとつしかありません。キリストにおいて私たちはひとつの体だからです。関係のない人なんて一人としていないのです。家庭にあっては家庭の中に、キリストを愛するように、大切に思うように、あるいは謙虚になって、自分の非を認めるようにしなさい。

教皇フランシスコが言うように、本当に困っている人に目を向けなさい。そして、あなたに出来ることをしなさい。

あなたの周りにそういう人はいませんか。声を掛けて欲しい人はいませんか。しかし、何もしない。それはどうしてですか。心の扉を開いてください。目を開いてください。

そういった意味で、私たちにとって家庭というのは、何があるだろうが、この私を受け入れてくれる場所。自分の居場所が準備されている安らぎの場。これが家庭に求められてい

ます。そして、もうひとつ特徴とされているのは、物に占拠されているということです。現代社会の豊かさのシンボルであるテレビをはじめとした物が部屋を占拠している。そして家族団欒の場という、ゆっくり話をしたり聞いたりする対話の空間がない。少しでも空間ができれば、色んな物でその空間を埋めてしまう…。ということが言われています。

私たちは神の家族ですから、ここに集うひとりひとりが、この教会に来て、本当に自分の居場所、安らぎの場所を見出すことができるように、整えていくという努めがあります。

私たちの祈りの場、祈りの時を大事にして、そこに神様を迎えることが大切です。物に占拠された家、部屋、学校ではなく、親子がゆっくり対話できる場所を設けることが大切です。同じことを教会で実現されたらどうでしょう。誰でも来やすい教会。批判する教会ではなく、「良く来てくれました」と、「キリストにつながるこの兄弟姉妹という関わりで豊かになりました」と言えるぐらいの心の幅、余裕を持ちたいです。

教会づくりは司祭ひとりがするものではありません。信徒の皆さんがいてこそその司祭です。信徒の協力がなければ司祭は何もできません。願うことは、この世の中、教会も神が自ら伝えたい、神が自ら語りたい、そういう場として、教会づくりをお願いします。そして、そこに共に集うことをお互いに喜び合い、過ちがあっても弱さがあっても、そこに集うことができたことを喜び合える共同体をつくられることを願います。
(記録/広報部 小林雅人)



エデン遊園地

ビル街のはしっこに、エデンという名前のおふしきな遊園地があるんだ。その遊園地は緑のペンキが塗ってある柵で囲まれていて、なかには噴水があったり、いろんな木が植えてあった。動物たちはほくたちがよじのぼったりできるように、本物の動物より大きく作ってあった。ゾウやキリンは同じ大きさだったけどね。

ある日、ほくはエデン遊園地にママといっしょに遊びに行った。そこには白いふわふわのおひげのサンタさんのようなおじいさんがいて、ずっと子どもたちとかくれんぼをしたり、

キャッチボールをしたり、おいかけっこをしたりしていたんだ。

ママはどうとうほくに言った。

「あなたもいってらっしゃい！」

サンタさんのおじいさんが、ほくを大喜びで迎えてくれた。「ほうや、きみの望みはなんだい？」

ほくはこたえた。

「いっしょに遊びたいのです。ほくは遊ぶのがだいすきなんだ!」「それはわしも同じだよ。さあ、いっしょに遊ぼう」

サンタさんのおじいさんは、うれしそうに言った。

「ほうや、わしはね、じつはみんなに神さまと呼ばれてるんだ。

でも、わしのことを、おとなたちは世界中でいちばん面白くない、厳しい者だと思っているんだよ」

「えっ、神さまってほんとうは遊ぶのがだいすきな?」

「もちろんさ、世界でいちばん美しく楽しいことって、わしと遊ぶことなんだよ。ほうや、いつまでも、わしと遊びつづけておくれ」

子どもたちが無邪気に神さまと楽しく遊んでいる。でも昔、子どもだった大人たちは、いつどんな時に幼子の心を忘れてしまったのでしょうか?いつも、いつまでも神さまと手をつないでいたいですね。

(広報部 工藤和子)